

授業改善サポート Q & A

中学校美術科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点を基に、授業づくりのポイントをまとめました。

気になる項目を確認し、日々の授業づくりにぜひお役立てください。

- Q1 授業づくりで、まず考えるべきことは？ P 1
- Q2 年間指導計画作成のポイントは？ P 3
- Q3 〔共通事項〕の指導のポイントは？ P 5
- Q4 題材を考えるときのポイントは？ P 7
- Q5 豊かに発想し構想を練るためのポイントは？ P 9
- Q6 話し合い活動のポイントは？ P11
- Q7 I C T 活用のポイントは？ P12
- Q8 学習評価のポイントは？ P13

Q1 授業づくりで、まず考えるべきことは？

A まず、学習指導要領解説に示されている美術科の目標を確認し、3年間の美術科の授業を通して、美術科の目標の実現を目指しましょう。

ポイント：美術科の目標や資質・能力ごとの評価の観点の趣旨を確認し、育成する資質・能力を明確にした上での指導と評価の一体化を意識しましょう。

【中学校美術科の目標】

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。

知識及び技能

(2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

思考力、判断力、表現力等

(3) 美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。

学びに向かう力、人間性等

文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編」を基に作成

美術科の目標の柱書には、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる」^{※1}資質・能力を次のとおり育成することを目指す」（下線は本研究による）とあります。美術科の目標の実現に向けては、育成を目指す資質・能力(1)、(2)、(3)を相互に関連させながら育成できるようにすることが重要です。



美術との関わり方は、人それぞれです。
生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わるようにすることが目標です。

※1 よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと

学習指導要領解説で示されている「新たな価値」を生み出すことと重なりますね！「造形的な見方・考え方」に示されていることは、これまでの美術科の指導でも大切にしてきたことですね。



- ※2 生活や社会の中の形や色彩などの造形の要素に着目し、それらによるコミュニケーションを通して、一人一人の生徒が自分との関わりの中で美術や美術文化を捉え、生活や社会と豊かに関わる

美術科の目標には、生活する中で様々な美術への関わり方があると示されているのですね！

3年間で美術科の目標の達成を目指すということは、単により作品を残すということではないのですね。



【中学校美術科における学年別の評価の観点の趣旨】

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
第1学年	- 対象や事象を捉える造形的な視点について理解している。 - 意図に応じて表現方法を工夫して表している。	自然の造形や美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、機能性と美しさとの調和、美術の働きなどについて考えるとともに、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を広げたりしている。	美術の創造活動の喜びを味わい楽しく表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。
第2学年及び第3学年	- 対象や事象を捉える造形的な視点について理解している。 - 意図に応じて自分の表現方法を追求し、創造的に表している。	自然の造形や美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図と創造的な工夫、機能性と洗練された美しさとの調和、美術の働きなどについて独創的・総合的に考えるとともに、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりしている。	美術の創造活動の喜びを味わい主体的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学校美術）』を基に作成

各教科等の目標を踏まえ、観点別学習状況の評価の対象とするものについて整理したものが、教科等の評価の観点の趣旨（下線は本研究による）です。各学年の目標を踏まえ、観点別学習状況の評価の対象とするものについて整理したものが学年別の評価の観点の趣旨（下線は本研究による）です。

中学校美術科の目標や資質・能力ごとの評価の観点の趣旨を確認し、育成する資質・能力を明確にすることが大切なのですね。

「生徒にどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉えた上で「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図りながら「指導と評価の一体化」の実現を目指し、生徒に必要な資質・能力を育んでいきたいと思います！



Q2 年間指導計画作成のポイントは？

A まず、3年間で育成を目指す資質・能力を明確にします。また、3年間を見通した計画（第1学年、第2学年及び第3学年の考え方や指導事項等を踏まえた年間指導計画）を作成します。他教科等との関連も意識しましょう。

ポイント①：3年間を見通し、生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にしましょう。

美術科の目標から、3年間の目標や計画を立てます。活動ありきではなく、3年間で生徒にどのような資質・能力を身に付けることができるようにするのかを、明確にしましょう。第1学年、第2学年及び第3学年で異なる目標を踏まえ、各学年の系統性を意識するようにしましょう。

学年	内容の取扱いにおける系統性
1	・基礎となる資質・能力の定着を図ることを重視し、表現及び鑑賞に関する資質・能力が幅広く身に付くようにします。
2・3	・第1学年で身に付けた資質・能力を柔軟に活用して、表現及び鑑賞に関する資質・能力をより豊かに高められるようにします。 ・第2学年と第3学年で生徒の実態が異なることも踏まえ、発達の特性に応じた題材を検討するようにします。

文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編」を基に作成

ポイント②：第1学年、第2学年及び第3学年で異なる授業時数を踏まえて、年間指導計画を立てましょう。

第1学年では、「A表現」（1）のア及びイを（2）と関連付けて、描く活動とつくる活動をどちらも扱います※¹。比較的少ない単位時間で各指導事項の内容が扱えるようにします。

第2学年及び第3学年では、学年で内容を選択でき、2学年間で全ての事項を指導することになります※²。ですから、第2学年及び第3学年では、第1学年よりも一つの題材に時間をかけることができます。



描く活動……スケッチや絵、グラフィックなデザインなど平面的な表現。立体の表面に描くことも含む。

つくる活動…彫刻や工芸、立体的デザインなどの立体的な表現。

「A表現」の指導計画の作成例1

A表現	(1)アと(2)		(1)イと(2)	
	感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動		伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する活動	
学年	描く活動	つくる活動	描く活動	つくる活動
第1学年	○	○	○	○
第2学年	○			○
第3学年		○	○	

※1

※2

ア及びイの内容、描く活動とつくる活動の組合せで考えると、大きく4つに分かれているのですね。

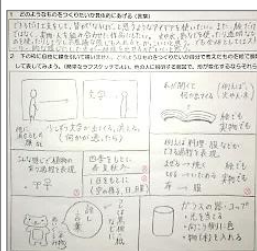
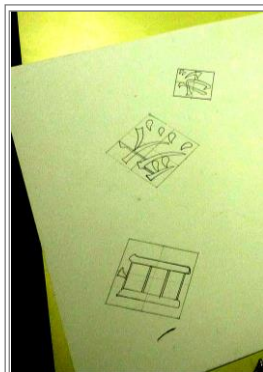


文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編」（枠線は本研究による）

ポイント③：他の教科・領域等との関連を意識しましょう。

中学校学習指導要領第1章総則で示されているとおり、中学校の教育課程の編成においては、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成が求められています。このことから、中学校美術科においても他の教科・領域等との関連を意識した授業づくりが重要だと言えます。

他の教科・領域等との関連（例）

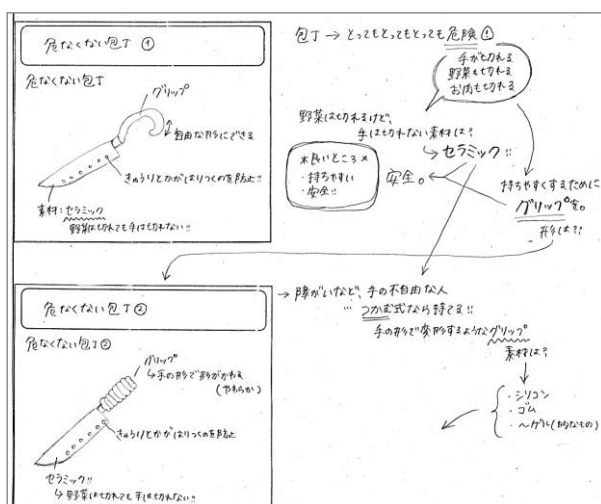


国語科との関連（例）

- ・コピーのつくり方などの学びを、他者に思いを伝えるポスターの題材で生かす。
- ・物語を基に、アニメーションで表現する。

理科との関連（例）

- ・生物の構造や進化の歴史などを、立体表現での主題を生み出す場面や発想を広げる場面で生かす。



技術・家庭科（家庭分野）との関連（例）

- ・生活上の課題や改善のヒントを基に、デザインの重要性を考える。

特別活動との関連（例）

- ・日本美術の鑑賞を、文化発表会や体育大会での横断幕、学級旗の作成などに生かす。

美術科だけで考えるのではなく、学校の教育活動全体で他の教科・領域等との関連を図ることが、学びの深まりにつながるのですね！



Q3 〔共通事項〕の指導のポイントは？

A 〔共通事項〕＝造形的な視点を豊かにするために必要な知識として、表現及び鑑賞の各活動に位置付けられています。

指導のポイントは、生徒が多様な視点から造形を豊かに捉え、実感を伴いながら理解できるようにすることです。このことが、今まで気付かなかった作品などのよさや美しさ、面白さなどに気付いたり、新たな意味や価値を発見したりすることにつながります。

以下は〔共通事項〕の指導上の配慮事項です。

ポイント①：色彩の色味や明るさ、鮮やかさについて



色の三属性などについて単に言葉を暗記させるのではなく、表現や鑑賞の活動の中で、色味、明るさ、鮮やかさという枠組みで色彩を捉えられるようにしましょう。

ポイント②：材料の性質や質感について



実際に材料を手に取りらせて、その感触などを十分に確かめさせ、材料の可変性などに気付かせるようにしましょう。

ポイント③：形や色彩、材料、光などが感情にもたらす効果について



色彩について暖色や寒色などを固定的に教えるのではなく、色彩が感情にもたらす様々な効果に着目させたり、そのような視点で色彩を豊かに捉えさせたりできるようにしましょう。

ポイント④：構成の美しさについて



リズムやリピテーションなどによる構成が単に類型的な狭い扱いにならないようにしましょう。動きや躍動感を実感的に捉え、試したり、組合せを楽しんだりするようにしましょう。

ポイント⑤：余白や空間の効果、立体感や遠近感、量感や動勢などについて



作品などを豊かに表現したり鑑賞したりするための重要な視点です。これらの視点をもつことによって、どのような効果があるのかを知り、考えることができるようにしましょう。

ポイント⑥：造形的な特徴などを基に全体のイメージで捉えることについて

最初の直感的なイメージも大切にしながら、見立てたり心情などと関連付けたりして全体のイメージで捉えることについて実感を伴いながら理解できるようにし、更に見方を変えるなどして新たな視点に気付いたり深められたりするようにしましょう。

ポイント⑦：作風や様式などの文化的な視点で捉えることについて

「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して実感を伴いながら理解できるようにし、単に美術史や知識の教え込みにならないように留意しましょう。また、作風や様式などから自分が捉えたことを他者と伝え合うなどして深めさせたり、文献などを調べて理解したことなどから、さらに、関連する作風などにイメージが広がるような活動を通して理解を深めたりしましょう。

佐賀県教育センターでは、他にも〔共通事項〕に関わる研究を行っています。

ぜひ参考にしてください！

○小学校図画工作科・中学校美術科研究委員会（H27）

〔共通事項〕を支えとした児童生徒の見方や考え方を深める指導方法の研究

ー形や色(色彩)を意識した言語活動を取り入れた指導を通してー



https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h27/04_zukou_bijutu/h27_koken_syoutyu_zukou_bijutu_toppage.htm

色彩 デザインするモノの特徴が分かるように、配色を考える。(白、黒を含む2色～3色)
※色鉛筆で配色計画をする。(美術資料P50～51参照)

使用している色数は？

色の面積も考えよう

色は自分のイメージで決めよう

明度と彩度による配色

同トーンの配色
明度(彩度)が同じ色

対照トーンの配色
明度(彩度)が高い色と低い色

類似トーンの配色
明度(彩度)が似ている色

形が分かりやすい配色は？

色の感情

寒暖の感じ
色相と関係が深い

軽重の感じ
明度と関係が深い

強弱の感じ
彩度と関係が深い

使用する場所の例

商品パッケージ

店舗の中

地図

コンテンツの資料(電子黒板で示した補足説明の一部)

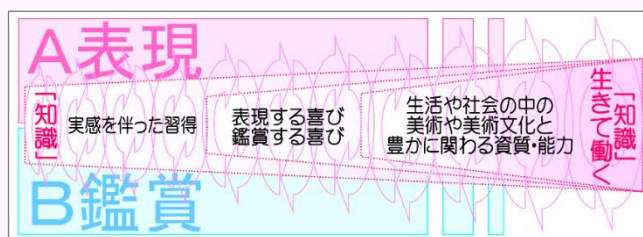
○中学校美術科研究委員会（H30）

生徒が生きて働く「知識」を習得する美術科学習

ー2領域を往還しながら実感を伴った「知識」の習得を促すことができるような手立ての工夫を通してー



https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h30/08_tyu_bijyutu/h30_koken_tyu_bijyutu_top.htm



中学校美術科における生きて働く「知識」の段階的な習得のイメージ

作品A	色彩や光の見え方について	使われている材料のこと	構成(組み合わせ)のこと
作品A画像	・マンモスは全身赤に染められている ・背景は暗い色で、マンモスの色が見える ・人物の顔がカラフル ・光沢のある顔が描かれている	・紙材 ・クレヨン ・鉛筆 ・水彩 ・油性マジック ・油性ペン ・油性マーカー	・マンモスの形を上手に描くようにしている ・背景の暗い色とマンモスの色を合わせている ・顔のパーツが明確に描かれている
説明・感想・評価のこと	・マンモスが歩いている ・顔は暗い色で描かれている ・顔のパーツが明確に描かれている	・作品全体のイメージ	・完成した世界に人々の動きを想像しているようなイメージ ・完成した世界に人々の動きを想像しているようなイメージ ・完成した世界に人々の動きを想像しているようなイメージ ・完成した世界に人々の動きを想像しているようなイメージ

ワークシートの構成例①(記入例)

共通事項	共通事項
共通事項の内容を整理した項目	共通事項の内容を整理した項目を基にアイデアスケッチに加筆された言葉

ワークシートの構成例②(記入例)

Q4

題材を考えたときのポイントは？

A 題材に必然性をもたせ、生徒が自分で主題を決めることができるようにし、一人一人の多様な考え方や捉え方を認め合えるような題材にします。

ポイント①：生徒の思いや願いを大切にするために、発想や構想に関する項目の全ての事項に「主題を生み出す」ことを位置付けましょう。

「主題を生み出す」とは、生徒自らが感じ取ったことや考えたこと、目的や条件などを基に、「自分は何を表したいのか、何をつくりたいのか、どのような思いで表現しようとしているのか」など、強く表したいことを心の中に思い描くことです。

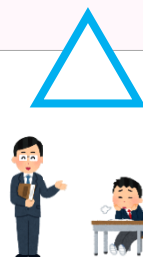
美術科の授業で一番大切にしたいことは、生徒の思いや願い（何を表したい、何をつくりたい、どのようにつくりたい）です。これが発想や構想の基盤になります。表現ありきではなく、どのような活動にも発想や構想に関する場面で、主題を生み出すことができるようにしましょう。

ア 表現領域の改善

主体的で創造的な表現の学習を重視し、「**A 表現**」(1)において、「ア 感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想」及び「イ 目的や機能などを考えた発想や構想」の**全ての事項に「主題を生み出すこと」を位置付け**、表現の学習において、生徒自らが強く表したいことを心の中に思い描き、豊かに発想や構想をすることを重視して改善を図った。

文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 美術編」（下線は本研究による）

今日の授業は「風景画を描こう」です。参考作品もあるので、各自で好きな場所を決めて工夫しましょう。



何のために描くのかな…

今日の授業は「私の大切な場所」です。学校の中で思い出に残っている場所の思い出を考えながら表現しましょう。ポートフォリオを確認して、最適な表現方法も考えてみましょう。



思い出に残っている場所を描きたいな！この前の時間に学んだ方法を使うのもいいかも！

同じような活動内容であっても、生徒が「主題を生み出す」ことができるような教師の働き掛けが大切ですね！



ポイント② : 生徒の「やってみたい!」を引き出しましょう。

題材の導入の段階における投げ掛けや提案の内容、方法を工夫しましょう。生徒の気持ちが動かされるような何かがあれば、生徒は題材に興味をもち、意欲的になっていきます。また、生徒が「やってみたい!」と思う授業では、まず生徒が「できる」と感じる事が大切です。その上で、「自分だったらこうしたい」「どうすればこうなるのかな」などの考えや疑問が出てくるようにしましょう。

扱う素材の魅力や扱う作品の魅力が十分に伝わるようにしたり、資料などの提示方法を工夫して、パターン化を避けたりすることも大切ですね!



ポイント③ : 生徒の身近なこと、身の回りのことにつなげることができるようにしましょう。

題材の導入の段階では、対象への共感や課題意識などが重要です。身近な対象の観察、身近な課題、地域での工夫点などを取り扱うことなども考えられます。特に第1学年では、対象が身近なものになるように配慮しましょう。実態に応じて、どのように課題を見いだしたり情報を提示したりすればよいか考えましょう。以下は、題材における例です。



佐賀城本丸歴史館のイベントを活用
(「プロジェクションマッピングの可能性」)



校内の植物を表現対象に (「私が感じた生命力」)



地元の企業、デザイナー (G T) を活用 (「私が考える優しさのかたち」)

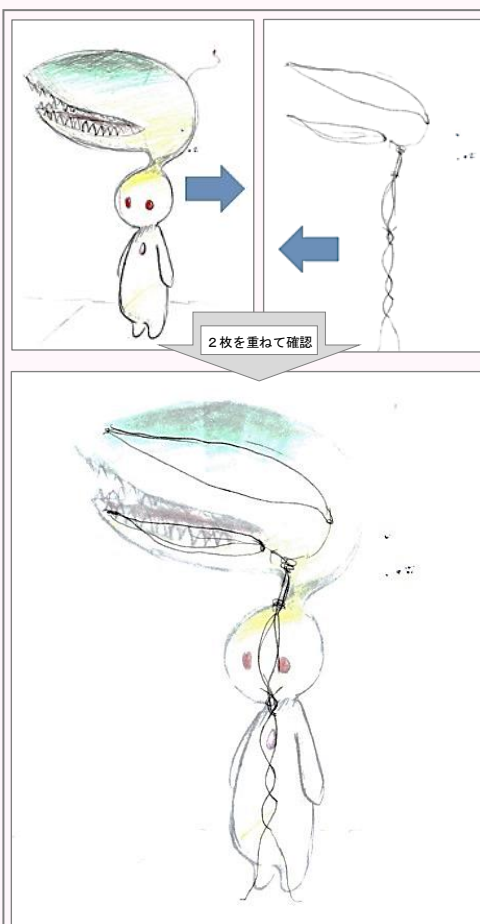
Q5

豊かに発想し構想を練るためのポイントは？

A 豊かに発想する段階では、考えをまとめることを目的とせず、多くのアイデアを出し、イメージや考えを広げられるようにします。構想を練る段階では、表現における主題をより深められるようにします。

ポイント①：実態に応じてワークシートの構成を工夫しましょう。

生徒の実態に応じて、説明する言葉を詳しくしたり、視覚的な情報の提示を多くしたりすることで、考えが広がったり深まったりするようにしましょう。

[illegible]

ボックスアートの題材における導入の鑑賞の段階から発想の段階までで活用したワークシート（学習過程を細かく示し、意見交換の内容も一覧できるようにした例）

立体での表現題材における完成イメージと骨組みの設計イメージを実物大で表現したワークシート（紙とトレーシングペーパーを活用した例）

学年によってどのような形式が適切かを考えなければいけませんね。特に第1学年では、見通しをもつという意味でもこのように細かく示すことが大切ですね！



立体表現の内部を意識できるようにするためのよい方法ですね。実物大で描かせるのもいいですね！



ポイント② : スケッチブック等を気軽に活用できるようにしましょう。

主題を生み出したり、アイデアを広げたりする段階で、表現することに抵抗感がある生徒もいます。学校で使用しているスケッチブック等は、とにかく気軽に描いてよいものという意識をもたせましょう。他者への説明的な表現、イメージする言葉などを、自由に表現してよいということを伝えましょう。



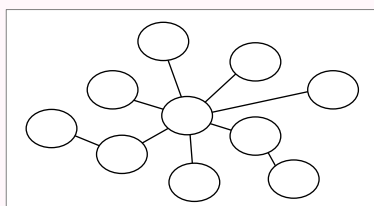
立体での表現の題材におけるスケッチの例

思いつくままに自由に表現していることが分かりますね。日頃から、スケッチブック等は、豊かに発想するために自由に使えるものだという意識をもたせたいですね。収集した情報などと併せるとポートフォリオとして生かすこともできますね！

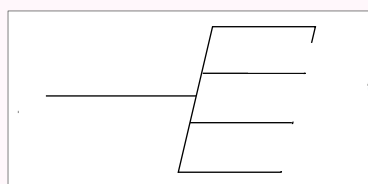


ポイント③ : 「思考ツール」を使ってみましょう。

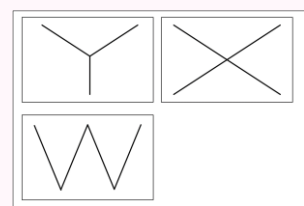
思考ツールには、幅広い多様なアイデアを生み出すときに用いる「イメージマップ（ウェビング）」、多様な視点から考えたり、複数のアイデアを出したりするときに用いる「クマ手チャート」、対象について多様な視点から考えたことをリストアップし、新しい考えを生み出すときに用いる「X/Y/Wチャート」など、様々なものがあります。目的に合わせて活用しましょう。



イメージマップ（ウェビング）



クマ手チャート



X/Y/Wチャート

Q6

話し合い活動のポイントは？

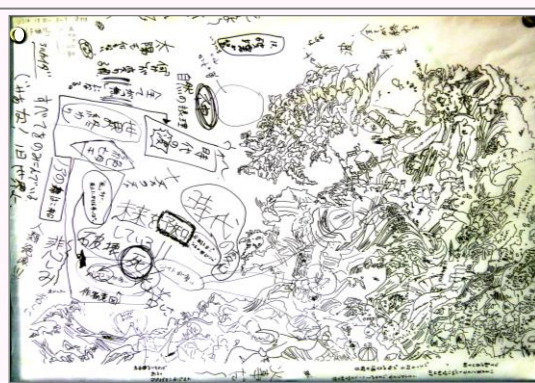
A 話し合い活動では、話し合う必然性、目的の明確化が重要です。個人での活動のあとに、必要に応じてグループや学級全体での話し合い活動を設定しましょう。



ポイント①：話し合う目的を明確にし、生徒と共有しましょう。

何のために、何について話し合うのか、明確にしましょう。例えば、鑑賞における対話的な活動の場面と共同制作における協議の場面とでは、目的が異なります。題材の目標に応じて、必要な場面で効果的に設定しましょう。このほかにも、進行などの役割分担の提示も重要です。

ポイント②：グループでの話し合い活動は、個人での活動を生かした活動になるようにしましょう。



鑑賞の題材で、個人の気づきを基に、グループで意見を共有しながら考えを深めた活動の例
(トレーシングペーパーをワークシートとして活用：左が個人、右がグループ)

個人での活動を生かしたグループ活動を行うためには、話し合う方法を工夫することが大切ですね。この活動では、描かれている対象などを形で描き起こしながら、同時に気付いたことも言葉で表していますね。造形的な見方・考え方を働かせることが意識された話し合い活動ですね！



ポイント③：学級全体での話し合い活動では、生徒同士の意見をつなぎ、生徒の考えが深まっていくようにしましょう。

教師

Aグループは、ここに挙げているもの以外にも理由を挙げていましたね。他にどのような意見がありましたか？

生徒

黒板に貼っている理由以外にも、〇〇〇〇という意見が多くありました。このデザインが〇〇〇〇だと思ったからです。

教師

なるほど！
だから〇〇〇〇のように考えたということなんですね。
Cグループは別の視点からの意見でしたね。どのように考えますか？



東京オリンピック選外エンブレムを再評価する題材における全体での話し合い活動の場面

Q7

I C T 活用のポイントは？

A 授業のねらいに応じて活用し、学習効果を高めることができるようにしましょう。目的は I C T の活用ではなく、資質・能力の育成です。

ポイント①：表現での活用

表現の題材で表現の方法として活用することで、表現の幅が広がります。アイデアスケッチなどの場面で、発想が苦手な生徒にとっては、インターネットの資料を使うことによってアイデアの幅が広がったり、ヒントになったりすることがあります。ただし、インターネット等の画像を検索し、そのままアイデアを写し取ったり、安易な発想になってしまったりすることもあります。あくまで発想のヒントとするなど、必要に応じて適宜活用しましょう。

アイデアスケッチが完成した生徒から画像データとしてクラスや学年共通のフォルダに保存し、いつでも互いの作品を鑑賞することができるようにしましょう。

ポイント②：鑑賞での活用

作品の写真をデータで提示することで、拡大したり、写真加工で白黒にしてみたりと、手元でじっくりと鑑賞することができます。また、彫刻などの立体作品は 360°どこからでも見ることで、作品の魅力がより伝わる鑑賞をすることができます。トリミング機能を使い、作品を切り取って鑑賞してみると、作品全体を鑑賞していて気付かなかった新たな発見や、構図の学習にもつながります。

佐賀県教育センターでは、I C T の活用に関するコンテンツを発信しています。

ぜひ参考にしてください！

○中学校美術科（R3）

1人1台端末の活用 アイデア集



<https://www.saga-ed.jp/2022/02/22/%ef%bc%91%e4%ba%ef%bc%91%e5%8f%b0%e7%ab%af%e6%9c%ab%e3%81%ae%e6%b4%bb%e7%94%a8-%e3%82%a2%e3%82%a4%e3%83%87%e3%82%a2%e9%b%86-2/>

端末の活用場面②

端末の撮影機能を使って、アニメーションのための画像を撮影している様子



○簡単に撮影することができました。本題材のように、表現そのものに活用することもあれば、ポートフォリオ用に、ワークシートや作品を撮影することも考えられます。

○一般的なデジタルカメラと比較すると、液晶画面が大きいので、撮影や確認の際にも見やすいという利点があります。端末によって、画質に差があるので、配慮が必要です。

5

表現の題材での活用例

Q8

学習評価のポイントは？

A 学習評価を行うに当たっては、生徒の資質・能力を育成できるようにすることが大前提です。そのためには、生徒の学習の進捗状況や目標の達成状況を適切に把握することが必要です。把握した内容をフィードバックして生徒の学習改善につなげ、教師は自身の指導改善につなげましょう。

ポイント①：学習評価には大きく2つの機能があることを理解しましょう。

○学習評価の機能

指導に生かす評価…児童生徒一人一人の学習状況を把握し、児童生徒の学習改善や教師の指導改善につなげるための評価のこと

指導に生かす評価の場面は、随時存在します。児童生徒の学習状況を把握し、「おおむね満足できる」状況(B)以上になることを目指して、必要な指導を適宜行います。

記録に残す評価……観点別学習状況の評価を総括する際の資料となるよう、学習状況を記録する評価のこと

記録に残す評価の場面は、毎時間設定する必要はありません。児童生徒全員の評価を記録に残す場面を精選することが重要です。単元や題材のまとまりの中で、評価規準に照らして、児童生徒の観点別学習状況を把握し、記録します。

佐賀県教育センター「平成29年改訂学習指導要領の趣旨を踏まえた学習評価の進め方（中学校美術科）」（以降「学習評価の進め方（中学校美術科）」）より抜粋

ポイント②：観点ごとの評価のポイントや評価規準作成のポイントを理解しましょう。

観点	観点ごとの評価のポイント（☆）評価規準作成のポイント（★）
知識・技能	○知識に関する評価 ☆〔共通事項〕が知識と位置付けられているので、〔共通事項〕について評価します。 〔共通事項〕… 「形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること」、 「造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること」 ★題材の評価規準は、〔共通事項〕(1)について、学習指導要領「2 内容の取扱いと指導上の配慮事項」の〔共通事項〕の取扱いと題材との関連を考えながら作成します。
	○技能に関する評価 ☆造形的な見方・考え方を働かせて、発想や構想をしたことなどを基に表すために、材料、用具などの表現方法などを身に付け、感性や造形感覚、美的感覚などを働かせて、表現方法を工夫し創造的に表すなどの技能に関する資質・能力を評価します。 ☆制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価します。 ★題材の評価規準は、「A表現」(2)の内容を基に題材との関連を考えながら作成します。 ★独立した「B鑑賞」の題材では、技能の評価規準を位置付けることはありません。

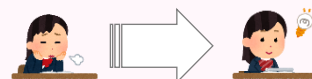
「学習評価の進め方（中学校美術科）」より抜粋（知識・技能の観点の例）

ポイント③：指導に生かす評価（形成的評価）の場面では、「努力を要する」状況の生徒への支援に重きを置きましょう。

日々の授業では、生徒一人一人への必要な支援を行うことに注力します。特に、「努力を要する」状況の生徒への必要な支援を重視し、言葉を掛けるようにしましょう。

教師の言葉掛け（例）

「○○を○○してみるのはどう？」（提案）
「○○みただね！すごいね！」（称賛）
「○○の部分はどうしたいの？」（投げかけ）



ポイント④：動画や画像などの記録を有効に活用しましょう。



動画の記録から表現のプロセスにおける学びを見取る(「学習評価の進め方(中学校美術科)」)より抜粋)

ワークシートや作品の評価はもちろん行いますが、表現のプロセスにおける学びを見取るときに確認が難しい場合があります。そのような場合は、画像、映像、音声等の記録がとても有効です。指導に生かす評価の場面で暫定的に「おおむね満足できる」状況(B)とした評価を、このような記録を基にした事後の確認によって「十分満足できる」状況(A)と修正することが考えられます。このような記録は毎時間残すことは難しいため、計画的に準備しておくことが必要です。

ポイント⑤：フィールドマップを有効に活用しましょう。

生徒の様子を毎時間、写真や動画で記録することはできないため、**ポイント④**の方法では確認が難しいケースもあります。毎時間の評価方法としてよく使われるものの一つにフィールドマップがあります。表現の過程を確認するためには、このような、指導に生かす評価の場面における簡単な記録がとても有効です。

/年 /組 題材「			/月 日(月)		
1 進まぬ → 資料 をたどり 再確認	7 教えている	18	7月 18日		
2 指導者 が → 指導 → 指導	8 色でかいた → 色あり	14 下デッサン → 時間 → 時間	14 下デッサン → 時間 → 時間		
3 生徒の → 生徒 → 生徒	9 色でかいた → 色あり	15	15		

フィールドマップの例

国立教育政策研究所の参考資料も御確認ください。

- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
(中学校美術) 」



https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_mid_bijyut.pdf



佐賀県教育センターの資料も御確認ください。

- 「学習評価の進め方(中学校美術科)」



https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/r2/04_tokumei/13_cyu_bijyutsu/cyu_bijyutsu.pdf

